

## 論文の内容の要旨

論文題目 ホッブズ『リヴァイアサン』の宗教論と聖書解釈—  
ピューリタン革命の脈絡で

氏 名 岡田拓也

政治思想史においてトマス・ホッブズ著の『リヴァイアサン』は第一級の政治哲学の著作として知られている。しかしホッブズには『リヴァイアサン』以前にも『法の原理』と『市民論』があり、高名な自然状態論や契約による国家の設立はこれらで既に論じられていた。『リヴァイアサン』の独自性はその宗教論、とりわけ『市民論』から大きく拡充された聖書解釈にある。だが『リヴァイアサン』で初めて展開された宗教論はしばしば奇妙であると評されてきた。分厚い蓄積のあるホッブズ研究においても、ホッブズがなぜ奇妙と評される議論を『リヴァイアサン』で展開するようになったのかは、これまで十分に説明されてこなかった。本稿はこの謎を解明し、『リヴァイアサン』の独自の価値を把握する試みである。

具体的には、『リヴァイアサン』以前の著作から『リヴァイアサン』にかけての宗教論の発展を精確に認識し、『リヴァイアサン』にのみ見出される議論を当時のピューリタン革命の脈絡の中で説明する。中心課題は、『リヴァイアサン』第3部のキリスト教論・聖書解釈の政治的意義を明らかにすることである。全体の構成は序論と結論を含む5部から成る。

第 1 部序論は方法論を詳述する。ホッブズのコンテクスト探究には不確実性が伴うことを踏まえ、以下の方策を取る。まず『リヴァイアサン』に関わるコンテクストとして検討する対象を『市民論』執筆後の新たな宗教状況すなわち 1640 年代内戦期のイングランドに絞る。そのうえで内戦期のピューリタンとアングリカン双方の政治的・神学的議論を広く考慮に入れる。

第 2 部はホッブズの政治哲学の三著作において宗教問題がいかに関与されたかを比較検討するテキスト分析を行い、以下の三点を指摘する。第一に、『リヴァイアサン』において新たに認識された問題群・コンテクスト探究の手がかりについてである。それは、聖書外で神から直接の啓示を受けたと称する「熱狂者」とピューリタン革命期の寛容論争の二つである。第二に、『リヴァイアサン』で初めて終末論が展開されるようになった背景についてである。それは聖職者の権力基盤に関してホッブズの理解が以下のように深まったことによる。聖職者は神の言葉を説くことで信奉者に対して権力を得、主権者にとって政治的脅威になり得る。とりわけ伝統的天国・地獄観が聖職者の権力の主要な源泉になっている。第三に超自然的現象についてである。ホッブズは『リヴァイアサン』で、『市民論』では「超自然的」で哲学の領域外にあるとされていた現象に、自然的理性の光を当てるようになった。ホッブズがいかにしてそれを成し遂げたかの解明が重要な課題である。

第 3 部は第 2 部のテキスト分析を元に、「熱狂」と寛容を中心に 3 つのコンテクストを扱う。第 1 章は熱狂の政治的コンテクストについてである。1640 年代後半にニューモデル軍の政治的・軍事的行動を、熱狂を通して正当化した軍説教師が現れた。ウィリアム・エブリーやトマス・コリアー、ウィリアム・セジウィックがその代表例である。これら軍説教師は、人間の内に宿る神の霊という特殊な形態の啓示を主張した。この軍の熱狂に対してはウィリアム・ウォルウィンやヘンリー・ハモンド等が反論を行った。その反論にはホッブズの熱狂への応答と共通する点がある。両者とも、啓示を受けたと称する主張に対してそれが本当に神に由来するのかを疑う批判的態度を推奨した。

第 2 章は熱狂の神学的コンテクストを明らかにする。内戦期には、聖書外で神から直接の啓示を受けたと主張する熱狂者など、聖書の権威に挑戦する者が現れた。それと同時に、この挑戦に答え神の言葉としての聖書の地位に合理的な根拠を与える試みも現れた。ホッブズも『リヴァイアサン』で聖書の権威について議論を大幅に拡充した。ピューリタン側ではエドワード・リーやジョン・グドウィンがこれを論じた。彼らは聖書の内容や聖書外の出来事に、神の言葉としての聖書の地位の根拠を求めた。アングリカン側ではセス・ワードおよびヘンリー・ハモンドがいる。彼らはこれを事実の確定の問題として捉え、使徒の証言の信憑性を確認するのに努めた。ホッブズ以外の上記の論者皆に共通する点も二つある。奇跡を聖書の権威の根拠とする点と、この問題の論証では数学的確定性に達することは不可能だと論じた点である。

第 3 章はアングリカンの寛容論を考察する。考察の中心はジェレミー・テイラーである。テイラーの議論は、アングリカンの寛容論の系譜—チリングワースと『リヴァイアサン』以前のホブズ—の中で捉えることが出来る。その議論にはいくつか顕著な特質がある。それは第一に、イエス・キリストへの信仰という最低限の信仰箇条を除き、信仰箇条の存在を否定的に捉えることである。第二に理性と神の権威との対比の否定である。第三にカトリックへの寛容の真剣な考察である。これらは『リヴァイアサン』でも同様に新たな議論の展開が見られた。

第 4 部では、ホブズの政治哲学 3 著作の中で『リヴァイアサン』の宗教論の特質を特定する。またその特定した議論を当時のコンテキストの中で説明する。

第 1 章から第 3 章は、ホブズの議論を軍説教師を始めとする熱狂者の政治的脅威に対する応答として理解し、その政治的意義を明らかにする。第 1 章は『リヴァイアサン』32 章における以下のホブズの基本的理論枠組みを示す。すなわち、夢などを通じた超自然的啓示を称する主張は、懐疑の目を向けてみれば実際には単なる自然現象かもしれず、真偽が不確かである。そこで啓示の真偽を判定する基準が必要である。それは聖書である。だが以上の議論では未解決の問題が残る。例えば、聖書は多様に解釈でき、基準がはっきりしない。ホブズは以下でこれを解消すべく聖書解釈に向かう。

第 2 章では『リヴァイアサン』34 章における、聖書内の「神の霊」の語義を分析するホブズのフィロロジーを扱う。その政治的意義は、軍説教師の説いた、人間の内に神の霊が宿るという観念には聖書上の根拠が無いと示したことにある。この分析は、聖書の言語の性質や自然と超自然の区別についてホブズが理解を深めたことから可能となった。ホブズの分析は、リーとリチャード・オーヴァトンの同様の聖書内の「霊」の語釈とある程度内容が一致する。

第 3 章では『リヴァイアサン』36 章における熱狂に対するホブズの最終的な回答を明らかにする。聖書内におけるあらゆる啓示の媒介の検討を経てホブズはこの回答にたどり着いた。熱狂に対するホブズの対応策はまず、啓示を受けたと称するあらゆる主張に対してそれが本当に真の啓示かと疑いを差し挟むことである。この懐疑は全市民の義務である。そのうえでホブズは、啓示の真偽の判定基準を特定した。すなわち、32 章では聖書であったのが 36 章では主権的預言者の判断と一義的になった。

第 4 章ではホブズの聖書の権威論を考察し、同時代におけるその特徴を明らかにする。第一にホブズは神と直接の交流を持った預言者や聖書の著者等に議論の照準を合わせている。第二に数学的論証に相当する議論を提示している。第三に政治問題として聖書の権威を捉え、その権威の基礎を主権者とその法に見出している。

第 5 章の主題は『リヴァイアサン』の中でも一際奇妙とされたホブズの終末論である。その理論的背景には第 4 章で検討した聖書の権威論がある。政治的意義としては、ホブズの終末論に

は、千年王国論者ヘンリー・アーチャーや第3部で言及した軍説教師の議論への応答としての側面がある。またホブズの終末論内の個別のテーマには、先駆者や近い考えの同時代人がいた。神の国は来世において地上に存在するというホブズの考えは、世界の終末期に到来する地上に存在するキリストの王国というアーチャーの観念と近似する。肉体の死後最後の審判での復活までの人間は死んだままであるというホブズの靈魂死滅論にはオーヴァトンからの影響があるとする有力な証拠がある。ホブズは神の慈悲を強調して伝統的地獄観における苦しみを大幅に緩和したが、ゲラルド・ウィンスタンリーら同様の関心から地獄の苦しみの緩和を提唱した者が当時他にも存在した。

第6章では『リヴァイアサン』における寛容論を扱う。主権者と市民との関係・市民同士の関係との二つに分けて考察する。ホブズは前者に関して、主権者に服従する際にも個人の判断の余地が残されていることを強調するようになった。また、市民には「偽」の宗教を奉じる主権者を「寛容」し服従する義務があると示すようになった。これはピューリタン等が真の宗教の名の下に戦争を遂行したのに対抗したものである。主権と関わらない範囲ではホブズは聖職者の権力の削減に努め市民同士の相互寛容を推奨した。この点でテイラーの寛容論の影響を受けた可能性がある。『リヴァイアサン』47章には、当時の宗教状況を原始キリスト教徒の独立になぞらえ最善とする著名な議論がある。これは『リヴァイアサン』で初めて登場する一連の寛容論と整合的である。

第5部の結論では、『リヴァイアサン』にのみ見出されるホブズの宗教論は、当時の（急進派）ピューリタン、とりわけニューモデル軍の軍説教師への応答としてその政治的意義が理解できることを改めて確認する。またホブズの議論は一方で同時代人の熱狂への応答・聖書の権威論・寛容論と類似する点もあるが、他方で懐疑の強調とその射程の広さにホブズの特徴が見られることが再度確認される。以上を通してホブズが『リヴァイアサン』で奇妙と評される宗教論を展開した理由が総括的に示される。